

笛吹市探訪

笛吹市の石造物

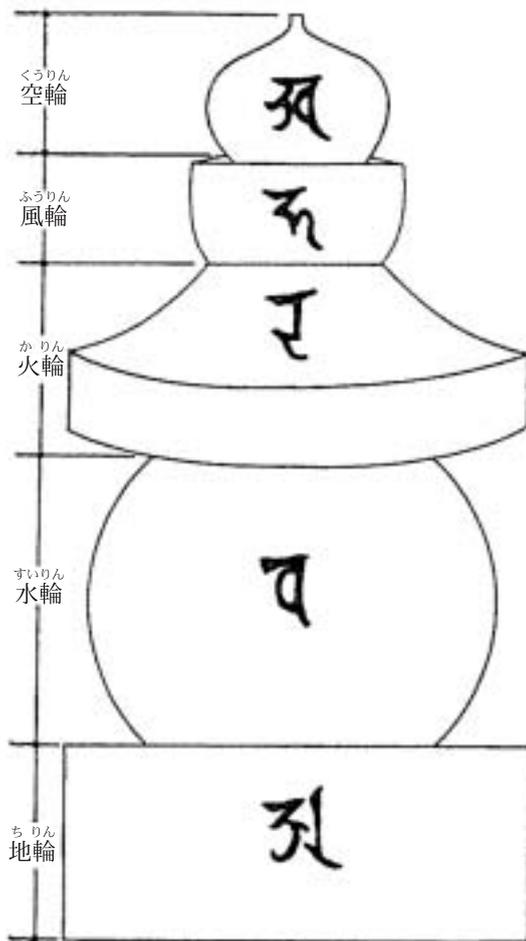
常楽寺の五輪塔 じょうらくじ

五輪塔とは、五つの図形（下から方形、円形、三角形、半円形、団形あるいは宝珠形）を重ねたものを立体化したもので、それぞれ、地・水・火・風・空を表わしています。この地水火風空の5つが宇宙の真理を表わすという五大思想に基づき図形化し、日本でこの図形を立体化したのが五輪塔とされています。そのため、中国などでは、立体化された塔の遺品は見つかっていません。ここでいう五大は五輪と同じ意味であることから、五輪塔のそれぞれの部位を、下か

ら地輪、水輪、火輪、風輪、空輪と呼びます。五輪塔が造られ始めたのは、平安時代後半とされていますが、鎌倉時代から江戸時代にかけて盛んに造られました。もともと、埋葬者の塚の上に五輪塔を立てて成仏することを祈願（大日如来を供養）したものでしたが、次第に墓標となり、供養塔や供養墓として造られるようになっていきます。このため、当初は密教でのみ用いられましたが、江戸時代ではほとんど宗派でも用いられるようになり、



常楽寺(じょうらくじ)の五輪塔



五輪塔模式図

また大きさも小形化していきます。境川町藤袋（ふじぬた）にある常楽寺には、この五輪塔が2基残っています。2基とも安山岩製で、1基は一部しか残っていません。もう1基は完全な形で、高さが1・76mと大きく、空風輪が1つの石で造られています。このように空風輪を一石にして造ることは珍しくなく、むしろ5つよりは4つの石から造られるほうが、多いようです。常楽寺が建てられたのは江戸時代（18世紀末）のことですが、常楽寺の建立のため、坊ヶ峯に五輪

塔を移すという趣旨の文書が残っています。その後道路の拡幅のため、再び常楽寺に戻されました。このことから、常楽寺建立前にこの五輪塔があったことがうかがえ、形や大きさから鎌倉時代のもので推定されます。常楽寺の近くの畑から、平安時代の瓦が採集されていることから、付近には廃寺となつた古代寺院が存在し、恐らくその寺にこの五輪塔があつたものと思われまふ。詳しいことはわかりませんが、この地域を支配する有力な豪族のお墓だったのでしう。